

自治労の「力」を実感

自治労いわて

発行所
自治労岩手県本部
発行人 来内 広幸
盛岡市南大通2-10-38
電話019-654-1702

震災に、 負けない 頑張ろう 岩手

自治労復興支援

被災自治体に大きな貢献

91日間、延べ4000人が岩手を支援

4月11日から展開されてきた自治労復興支援活動が7月10日に終了しました。91日間、自治体職員の負担軽減を目的に、避難所運営をはじめ多種多様な支援活動が行われてきました。全国の仲間による長期に渡る活動は、自治体職員だけでなく地域住民からも大きな信頼を獲得し、自治労の存在感を強く示すものとなりました。活動で示された自治労の「力」を胸に刻み、岩手県本部は今後の取り組みにつなげていきます。全国の仲間へ感謝を申し上げます。



最終日の7月10日、午前11時から市役所前で解散式が行われる予定でしたが、午前9時57分に三陸沖でM7・1の地震が発生、津波注意報も出されたため解散式は中止に。県本部はBCの沢田屋に向き、支援団に対しこれまでの活動への感謝の意を述べました。



サイレンが鳴り響くなか、沢田屋を出発する自治労支援団と見送る現地スタッフ。全国の仲間の長期にわたる支援、本当にありがとうございました。



県本部執行委員長
来内 広幸

全国からのご支援に感謝

3月11日の地震発生以来、全国の仲間の皆さんから物心両面にわたり心温まる御支援をいただき心から感謝申し上げます。

さて、3ヶ月あまりに及ぶ自治労の復興支援活動の結果、宮古市においては、

被災者への義援金の交付が県内トップで始まり、仮設住宅への入居も進むなど、復旧から復興へと着実な前進が実感できます。

また、自治労未加盟の山田町においては、一ヶ月半に及んだ支援活動の結果、徐々に行政機能も回復しつつあります。

今回の支援活動では、あらためて、広く被災地域に自治労の組織力の高さをアピールする一方で、「安

全、安心のまちづくり」の必須条件は、公的サービスの担うマンパワーの確保であることを明らかにしました。

県本部は、8月7日まで、引き続き宮古市内の避難所の運営支援を継続中です。

結びに、被災地の完全復興への道のりは険しく、まだまだ長い時間がかかりますが、各単組のご協力を得ながら、組織の総力を上げて取り組む決意を申し上げます。感謝の言葉といたしま



自治労支援団が配置された避難所の状況

避難所	4月上旬の避難者数 (在宅通所含む)	7月25日時点の避難者数 (在宅通所含む)
グリーンピア	481	10
宮古第二中学校	140	14
鎌ヶ崎小学校	219	98
愛宕小学校	161	—
宮古小学校	236	49
山口小学校	85	17
赤前小学校	130	—
シーアリーナ 市民総合体育館	165	69
豊間根中学校	121	56
山田高校	576	180

東日本大震災とその後の余震による死者・行方不明者は2万451人。警察庁緊急災害警備本部が7月25日発表したところによると、死者は1万5628人、行方不明者は4823人にのぼっています。

県本部の各単組で支援を継続



岩手県本部は7月10日から宮古市総合体育館での避難所運営の支援を開始しました。全国の仲間の経験と気持ちを引き継ぎ、24時間体制で取り組んでいます。支援行動は8月7日まで取り組まれる予定です。

人々の生活基盤が大きく破壊されました。加えて福島第一原発の事故も加わり、二重三重の苦しみ被災者に襲いかかりました。

山田町への支援も加わりました。全国から支援のために来県した仲間の士気は高く、長期に渡る支援を安定的に継続することを可能なものになりました。

シリーズ ～自治労復興支援に参加して～ 参加者の声⑤

自治体労働者としての誇りを持って

自治労山形県本部川西町職員労働組合 佐藤 朋和 さん



報道を通じての惨劇を目にするたびに、被災地に赴いて果たして組合員の皆さんの役に立てるのであろうか。一抹の不安を持ちながら復興支援に臨みました。今回私たちの任務は直接住民の方と接する義援金等の申請受付業務でした。住民の方との会話からメディアでは取り上げられないことのない苦悩や憤りを感じることができました。

その一方で同じ被災者でありながら行政サービスを行う自治労組合員の働き方、働かされ方は過酷を極めるものであったと思います。毎日の深夜におよぶ時間外労働、震災以降ほとんど休暇を取ることのできない状況は「有事である」ということだけでは割り切ることの出来ないものでした。言い換えれば行政サービスを必要としている住民ニーズに、現状では対応することの出来ない労働環境に置かれていることが如実に表れている、つまり組合員一

人ひとりの頑張りに頼り切っている行政運営が明らかになっていました。その背景にはなにがあるのか。この間の合理化、人員削減であることは紛れもない事実です。しかしメディア・資本は、このような状況下におかれても社会のセーフティーネットとして行政サービスを提供している自治体職員の現状を知りもせず、行政は何もしてくれない、行動が遅いという公務員バッシングを続けています。さらに政府による国家公務員の賃金一割の削減は怒りを覚えるばかりです。この現状を打開するには今こそ自治労に結集してたたかっていくこと以外に解決の道はありません。

私たちの被災地での支援は短期間であり、逆に受け入れていただいた宮古市職員の方には迷惑をお掛けしたのではないかと考えています。復興には相当の時間を要するはずで、私たちも同じ自治労組合員として今後も最大限の支援をしていきます。健康には留意をいただき社会のセーフティーネットを提供している労働者としての誇りを持って業務にあたってください。

友情、連帯、団結。ともに頑張りましょう。



左が佐藤さん
原稿は5月20日に頂きました。

避難所の方々の笑顔と努力を決して忘れず

自治労大阪府職員労働組合 曾野部 真吾 さん



東北には親類や友人もおおり、かねてからボランティアへ行きたいと思っていましたが、なかなかタイミングがあわず、今回やっと自治労の取り組みに参加させて頂きました。花巻空港を降りて、盛岡を経由し、道中の内陸部では地震の影響は見受けられませんが、海が見え始めたその頃、更地が広がる光景に、まず驚きました。テレビで見慣れたつもりでしたが、被災地の現実について、報道では全て網羅できないものと知りました。

私が避難所のお手伝いをした山田町も震災当時の火災による焦げ跡や溶けた鉄骨が多く直視できない光景が広がっていました。二百人以上の住民を抱える

山田高校の体育館避難所で運営管理のお手伝いということでしたが、なかなか勝手が分からず失敗の連続でした。避難所のルールを乱さないこと、住民に不公平感を与えないことなど神経を使う場面もありました。長期に及ぶ避難所生活に住民の肉体的・精神的疲労はピークに達し

ていると思われましたが、子供たちは礼儀正しく挨拶し、住民はお互いを気遣い優しい言葉をかけあい、それぞれの役割をこなし、規則正しい共同生活が確立していました。大阪のような人間関係の希薄な都市部では考えられないことです。

また、自身も被災者なのに震災直後から避難所運営に休むことなく全力を注ぐ職員や臨時職員に手をあげた避難所の方々に、厳しい現実にも正面から向かう避難所の方々に、住民同士の深い絆を垣間見て、将来の復興が必ずや実現されると感じました。半人前のボランティアで大した働きはできませんでしたが、被災地の惨状と避難所の方々の笑顔と努力を決して忘れずに伝えることが、私にできることだと思います。

終わりに我々を受け入れてくれたホテル沢田屋の皆さん、また自治労岩手県本部、岩手県職労、宮古市職労の皆さんに感謝いたします。復興への道のりは長いでしょうが、あまり無理をせず、これからも前向きに頑張ってください。



左が曾野部さん
原稿は7月15日に頂きました。

復興までの道のりを一歩ずつ進んでいこう

自治労兵庫県本部伊丹市職員労働組合 中村 雅光 さん

兵庫から第13グループ(7月2日～10日)として岩手県に派遣となり、山田町立豊間根中学校体育館で避難所支援業務に携わった。体育館と格技場にはあわせて約80人の被災者がおられ、協力し合い規律と秩序ある生活をされていることに安心した。任務としては、ボランティアが製作された風呂の掃除、自炊でまかなわれている食事の配膳、ゴミの分別など、日常生活の側面支援といった内容で、基本は一日が朝5時の起床から夜9時半の消灯までとなっている。

全体としては8泊9日の行程のうち、24時間勤務が3回と12時間勤務が1回で、振り返るとあっという間に過ぎた。短い期間の中で貴重なお話を聞かせていただくこともできた。避難の際に津波が足元に寄せてきたことや、その後の雪の降るような日々を毛布一枚を子どもと分け合っただけで過ごされたことなど、命にかかわる大変な経験をされているが、この避難所でこうしてみんなと話ができることがとても嬉しいと話をしていただき、私たちに代わってとても温かく接していただき、逆に自分自身が元気づけられた。



中村 雅光さん
原稿は7月22日に頂きました。



着任して数日後から急に日中の気温が上昇し、町内でも38.5℃を記録するほどの猛暑となった。緑の多い豊間根地区も日差しがきつく蒸し暑くなり、高齢者のみなさんが熱中症にならないよう、体育館の窓を開け、扇風機を回し、十分な水分補給をお願いした。しかし、このような暑い場所で生活され、今夏を乗り越えなければならぬのかと不安を感じつつ、まずは一日も早く仮設住宅に移ることが出来るようにと願い任務を終えた。

10日の朝、帰り際に兵庫から来た6人全員で挨拶をすると、元町職員の責任者の方からは「お世話になりました。でもこれから大変になります」と言われ、町民の方からは「ご苦労さん」とねぎらいの言葉をかけていただき、感謝の反面、特にお役にも立てず申し訳ない気持ちになった。

このような未曾有の大規模災害に対して一人でできることは限られているが、自治労として切れ間なく被災地の仲間支援を続けることができたことに対し組織力の素晴らしさを実感した。復興までの道のりは長い。今後も出来る限りの支援を継続していく事が大事だと感じている。お互い一歩ずつ進んでいきましょう。大変お世話になりました。

